

米谷匡史著
『アジア／日本』
岩波書店 二〇〇六年

近代特有の「暴力」がアジアと日本の関係に刻印されてきた複雑な過程を、丹念な文献渉猟と鋭利な分析的思考の手さばきによつて精緻に読み解いた歴史批評の名著が上梓された。日本の思想的な文脈において、言説としての「アジア」が記述＝表象されるとき、錯綜する文化政治学のはざまに生起する紛争と交渉をめぐる微細な相互作用のプロセスを、とりわけ「アジア主義」「アジア連帯論」の思想がはらむ「侵略／連帯の両義性」という問題意識から捉えた系譜学的叙述が本書である。

一九世紀後半、東アジアの地政学的情況にあつて、西欧のナショナリズム原理が生み出した帝国主義・植民地主義に依拠する世界システムをみずから選択・受容することにより、急速に中央集権的な「国民国家」として再編された近代日本。そうした帝国Ⅱ日本の歴史過程が必然的にはらむ「暴力性」を、ポストコロニアリズム批評の側から表面化させ、支配的な知の制度と権力に依拠する歴史言説の書き換えを試みる真摯な批判意識に支えられた議論は、本書巻末に収録された充実した基本文献案内にもみられるように、いまや一定の蓄積と達成を獲得し

つつある。日本思想史研究の俊英による本書もまた、基本的にそのような近年の人文学における帝国主義・植民地主義批判の思潮の流れを汲む、新たな成果のひとつに数えられるだろう。

だが、そうだとしても、ともすれば現在の亜流ポストコロニアリズム批評の多くが陥りがちな表層的・刹那的な倫理主義的断罪の態度に、本書が与することはない。冒頭に述べられているとおり、たとえば言説としての「日本」と「アジア」との関係性を、「発展する文明」と「停滞する野蛮」といった自己／他者表象をめぐる非対称的な認識枠組にかさねあわせ、そうした意図的に単純化された二項の対峙関係の構図をみずから再演しながらオリエンタリズムの言説の暴力性を糾弾し非難するような語り口は、往々にして、「脱亜論」のような、本来ならばそうした語りが批判的に解体しなければならないはずの言説の基本構造をそのまま温存しながら生産されるという逆説に、筆者の繊細な思考力はつねに注意深くあらうとする。

「アジアと日本の絡まりあう関係」「アジア」と「日本」が端的に別個のものではなく、差異化しながらたがいに深くかわり、絡まりあつていく問題領域——ときに「ゆらぎ、越境する相互浸透」などといった独特の表現として変奏されながら本書の文中に執拗に反復されるこれらのフレーズは、筆者の認識論的な視角が最終的に到達しようとする地平、すなわちアジアにおいて矛盾と葛藤のなかで探求を粘り強く模索する知的態度への信頼を示しているというべきだろう。

大東亜戦争Ⅱ太平洋戦争の来歴と帰結に、日本国家によるアジアへの植民地侵略戦争と同時に帝国主義的欧米の覇権からの解放の契機をみた、中国文学者・評論家の竹内好による「近

代の超克」論。あまりにも有名なこの論考は、これまで様々な論争や批判の対象とされてきたが、戦時中は国家の趨勢に加担もした竹内によるこのような「二重構造のアポリア」論の限界を冷静に見定めつつ、しかし筆者は、戦後の竹内好が自己批評的な屈折を内にかかえながら「アジアを主体的に考える姿勢」を保持したことを積極的に引き受けようとする。この「二重構造のアポリア」の系譜学こそが、本書の筆者が格闘する思想言説の主たる戦場だといえよう——ひとつは一九世紀末の勝海舟、西郷隆盛、福沢諭吉など近代日本の政治思想や世紀末転換期の中国、朝鮮、沖縄における文明化論など、アジアの近代化をめぐる言説の系譜。もうひとつは戦間期・戦時期における吉野作造、矢内原忠雄、三木清、尾崎秀実らによる東アジア変革論の系譜。その両者に折り畳まれた衝突しあう複数の言説の拮抗関係のはざまに介入し、それらの葛藤、亀裂、抗争、摩擦、矛盾、利害の錯綜を抉り出し精緻に叙述すること、またそうすることで言説としての「アジア」を限りなく脱構築すること、それこそが筆者の戦略的なねらいだったのである。

本書の議論の射程は歴史的な事象のみならず、たとえば現在進行形の「東アジア共同体論」にも届いている。昨今、保守と革新双方の勢力から語られる「東アジア共同体論」をめぐる多分に幻想的な言説が、どれだけアジアの「近代」が背負う裂傷と向き合う覚悟があるのかを問いかけ、日中戦争の時代に「きびしい抗争の渦中で、「空虚」なアジア連帯論を退けつつ、東アジアに張り巡らされた矛盾・葛藤に向き合う繊細な眼差し」を持ちえた戦間期の異形のジャーナリスト尾崎秀実の「東亜協同体論」批判を肯定的に評価しながら、筆者は本書の末尾にこ

う書きつける。

それは矛盾に苦しみ、身もだえする〈アジア〉を生きながら、ねばり強く〈抵抗〉と〈連帯〉を考える自立した思考です。

そこで垣間みられた、社会改革と自立・連帯をめざす不可能な夢。そこには、今なお読み解かれない謎が横たわり、現在を生きる〈わたしたち〉に投げかけられているのです。(166)

「アジア／日本」をめぐる筆者による粘り強い歴史批評・歴史叙述の試みが、じつは伸縮自在な歴史の可能性を「夢」「謎」といった語に託し、歴史の苦悶を「現在」の閉塞に接続しながら問いかけを発する〈アクチュアル〉な実践哲学の意志力に裏打ちされたものだったこと——最後のこの一節にたどり着くとき、読者はそうした本書の隠された意図の端緒を理解することになるであろう。

(今福龍太)